

## 9. 家庭科論文

夢や目標をもち、共にみがき高め合う子どもの育成Ⅱ

### 家庭生活を工夫し続ける子どもの育成 ～自己の成長を実感する家庭科カリキュラムの創造～



I 研究の目的	109
1 研究の背景	109
2 研究の方向	109
II 研究内容	110
1 家庭生活を工夫し続ける子どもとは	110
2 自己の成長を実感する家庭科カリキュラム創造の基本的な考え方	111
(1) ストーリー展開の活用	111
(2) 「生活を工夫する力」を発揮するよさを実感させる場面の明確化	111
(3) 根拠に基づいた体験活動の充実	111
(4) 言語活動の充実	111
3 自己の成長を実感する家庭科カリキュラムの全体構想	112
(1) ストーリー展開の活用	113
(2) 「生活を工夫する力」を発揮するよさを実感させる場面の明確化	113
(3) 根拠に基づいた体験活動の充実	113
(4) 言語活動の充実	113
4 自己の成長を実感する家庭科カリキュラムの具体化	114
(1) 題材配列の具体化	114
(2) 家庭生活において自己の成長を実感できるストーリー展開の具体化	115
III 研究の実際	116
1 実践の立場	116
(1) 実践の視点	116
(2) 実践の評価	117
2 自己の成長を実感する家庭科年間指導計画（第5学年・第6学年）	117
(1) 実践の立場	118
(2) 題材「生活に役立つ物を作ろうⅠ～古着の大変身～」における題材の目標	118
(3) 題材「生活に役立つ物を作ろうⅠ～古着の大変身～」における授業実践	118
(4) 実践の考察	119
IV 研究の成果と課題	120
1 研究の成果	120
2 研究の課題	120

【学校教育目標】

夢や目標をもち、共にみがき高め合う子どもの育成 【校訓】 まことの子・ちからの子・のぞみの子

【目指す子ども像】

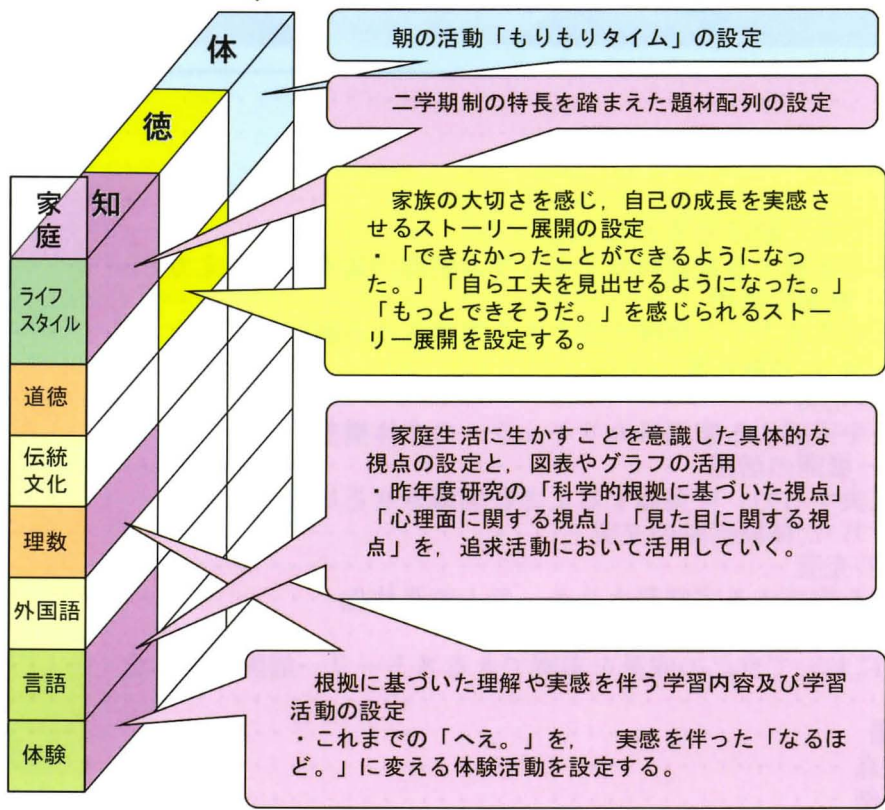
(知) 互いの考えに学び合う子ども (徳) 心と心がひびき合う子ども (体) 心と体をきたえ合う子ども

【本校の主な教育課題】

確かな学力の面から ○論理的な思考 ○伝え合う方法の習得 ○学ぶ喜びや楽しさの実感	豊かな心の面から ○人間関係(他者意識) ○自己の発揮の仕方 ○多様な体験	健やかな体の面から ○基礎体力 ○生活習慣 ○健康・安全
---	---	---------------------------------

【確かな学力、豊かな心、健やかな体を調和的にはぐくむカリキュラム】

		健やかな体をはぐくむ観点(体)													
		豊かな心をはぐくむ観点(徳)													
カリキュラム創造の視点		確かな学力をはぐくむ観点(知)													
		国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図工	家庭	体育	道徳	外国活動	総合	特活	複式
カリキュラム創造の視点	枠組	学校のライフスタイルの見直し													
	内容	道徳教育の充実													
		伝統や文化に関する教育の充実													
		理数教育の充実													
		外国語教育の充実													
	方法	言語活動の充実													
体験活動の充実															



## I 研究の目的

### 1 研究の背景

今回の学習指導要領の改訂では、少子高齢化が進み家庭の機能が十分に果たされなくなりつつあるという社会的背景に基づいて、衣食住などの生活の営みの大切さに気付くことや、生活をよりよくしようと工夫する能力と実践的な態度の育成が重視されている。そのためには、実験・実習等を通して課題を解決する学習活動や、図表やグラフなどを用いて根拠を基に話し合う活動の充実が大切である。これらの学習活動を充実させることで、「生活を工夫する力」を身に付けるとともに、自分の家庭生活に応じて学習したことを生かす実践的な態度を身に付けることができる。また、自分が家庭生活において工夫し実践できることを実感できると、改めて家族の工夫のよさに気付いたり、さらに家庭で生かしていきたいという思いが生まれたりする。昨年度の研究において、家庭科における言語活動を心理面や見た目、科学的根拠に基づいた視点で充実させることで、客観的な視点を基に、話し合いを行うことができるという成果が得られた。さらに、「生活を工夫する力」(＝家庭科における思考力・判断力・表現力)が高まることで、関心・意欲・態度にも高まりが見られた。一方で、知識・理解・技能についても充実した目指す子ども像を明らかにして調和のとれた力を培う必要があるという課題も生まれた。

本校でも、家族が互いに多忙であり、家族と関わる時間や団欒の時間が不足したり、家庭における手伝いの経験はあるが、継続的に家庭での“役割”として果たす自分の仕事は少なかったりしているという実態がある。このことから、自分の生活が家族によって支えられていることを実感したり、自分が家族の一員として家庭生活をよりよくしたいと考えたりする機会をもつ必要があると考える。

### 2 研究の方向

本年度は、これまでの研究の成果と課題、社会的背景や児童の実態を踏まえ、目指す子ども像を設定し、目指す子ども像を具現化するためのカリキュラム創造の視点を明確にしていく。

子どもたちが生活する上で、精神的にも身体的にも基盤となるのが家庭生活である。家庭生活の中には、家族の一員として担うべき様々な営みがある。また、それらは、生きている限り続く営みである。これから生きていく中で、自分の生活から問題に気付き、課題に応じてよりよい方法を見付け出していく力が必要であり、学習後も継続できるものでなければならない。そのためには、自分を見つめ、家庭において自己の成長を実感させることが有効である。そうすることで、これまでできなかったことができるようになった有能感、自分主体で解決できた自己決定感などを味わうことができ、家庭生活を家族の一員として支えていこうとする意欲や姿につながるからである。

そこで、本年度の研究テーマを次のように設定し、研究を進めていくこととした。

**家庭生活を工夫し続ける子どもの育成**  
～自己の成長を実感する家庭科カリキュラムの創造～

## Ⅱ 研究内容

### 1 家庭生活を工夫し続ける子どもとは

家庭生活を工夫し続ける子どもとは、家庭科の学習時間において、3つの力を駆使して家庭生活の中から問題点に気付き、その問題から課題を設定し、課題に応じてよりよい方法を工夫し、実践し続ける子どものことである。

子どもは、学習を通して、自分の家庭生活の中にある課題に対する工夫の仕方を学ぶ。その工夫の仕方を学ぶことによって、できるようになった

自分の成長に気付き、学んだことを自分の家庭で生かしたいという意欲をもつことになる。このように、学習を通して「できるようになった自分」「自分の課題に対して、様々な工夫ができるようになった自分」などに気付かせ、自己の成長を実感させることが、学習後も家庭生活を工夫し続ける子どもの姿へとつながるのである。

そのためには、これまでのカリキュラムを工夫・改善し、自己の成長を実感するためのカリキュラムを創造することが必要である。しかし、

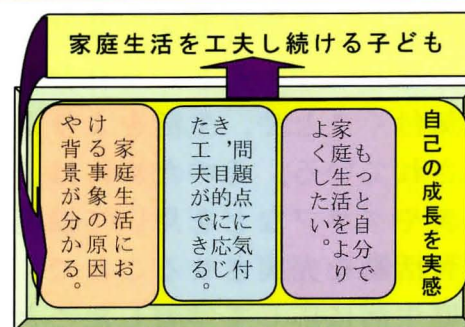
家庭生活が多様化している現在、各家庭における問題は、各家庭によって様々である。家族構成、家族の生活スタイル、家の設計、家庭にある道具などを考慮しなければならない。そこで、子どもが自分の家庭生活へ応用できるような学習展開の工夫が必要である。具体的には、基本となることを共通の学習課題として学び合い、身に付けたことを自分の家庭生活に置き換えて考え、実践できるような学習の流れを工夫したい。

次に、自己の成長を実感するためには、家庭生活の機能を理解したり家族の大切さを実感したりする必要がある。そこで、めざす力（表1）の調和を考えたカリキュラム創造をする必要がある。具体的には、家庭生活における“なりたい自分”像を描き、成長した自分・高まった自分を実感することで、更に関心・意欲が高まっていく。また、課題解決の過程や自分で調べたことの結果を観点に基づいて関連付けたり、条件をそろえて比較したりするなどして、よりよい工夫を見つける「生活を工夫する力」も必要である。さらに、自ら設定した課題を追求し工夫する中で、家庭生活の営みに関する知識や技能のよさを実感し、定着できるようにすることが大事である。

このような活動に、工夫した理由や工夫を選択した理由、また、友達の工夫との比較など、様々な活動において言語活動を取り入れ、互いの工夫の仕方について学び合えるようにすることで、それぞれの学力が強固なものになると考える。

【表1 学力の観点ごとに置き換えた子ども像】

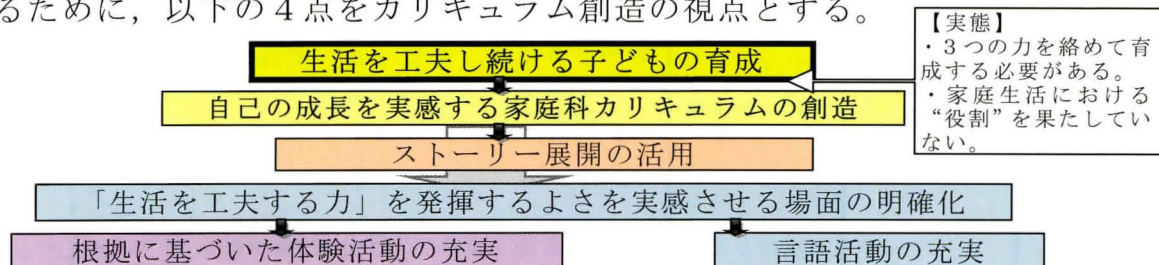
学力の観点	子ども像
関心・意欲・態度	家庭生活において自分の役割をもち、家族の一員として家庭生活をよりよくしようとする子ども
「生活を工夫する力」	友達との学び合いの中で、互いの考えを基に、目的に応じた方法を見出すことができる子ども
知識・理解・技能	家庭生活の営みについて理解し、事象についての原因や背景が分かる子ども



【図1 目指す子ども像】

## 2 自己の成長を実感する家庭科カリキュラム創造の基本的な考え方

自己の成長を実感するとは、これまでできなかったことができるようになったこと、家族の一員として役割を担うことができるようになったこと、家庭生活を自ら工夫できるようになったことを実感することである。自己の成長を実感できるようにするために、以下の4点をカリキュラム創造の視点とする。



【図2 カリキュラム創造の視点の関係付け】

### (1) ストーリー展開の活用

自己の成長を実感したり家族の大切さを実感したりするために、カリキュラムの中でストーリー展開をさせ、2年後の自分の姿を想定させて子どもの意識を高めていく。子どもには学習前の自分や学習後の自分についても考えさせるようにする。その際、5年生の学習開始時に家庭科のオリエンテーションとなる題材を設定し、2年間の見通しをもたせるようにする。また、本校で実施している二学期制において、前期、後期の学習と、夏季休業や冬季休業などを活用して、家庭生活上で生かせるように学びの連続性を考慮して題材を配列していくようにする。

### (2) 「生活をつくる力」を発揮するよさを実感させる場面の明確化

生活を工夫するよさには、「ある目的に対して、生活を工夫する方法は多様にあること」や、「それぞれの工夫の仕方に自分の家庭に合ったよさ」などがある。それらに気付かせるために、問題解決的学習の中で自己の成長を実感できる活動を導入する。特に、習得・活用の場面においては、自己の成長を実感できるように重点化する。

### (3) 根拠に基づいた体験活動の充実

実感を持った学びができるようにするために、家庭生活と関連付けながら、根拠に基づいた体験活動の充実を図る。物作りや実習だけではなく、調べ学習における実験や家庭での実践なども重視する。そうすることで、単に知識や技能を習得するだけでなく、なぜその仕方がよいのかを納得して習得することができる。そのために、各体験活動において、どのようなよさがあるのかを見つけさせたり、考えた工夫のよさを確かめるために体験したりするなど、科学的な根拠が明確になるような体験活動を取り入れていくようにする。

### (4) 言語活動の充実

課題を解決する場や自分で工夫の仕方を見つける場、工夫したことを学級全体で話し合う場において、言語活動を充実させていく。具体的には、①「どこを」「どのように」工夫することができたか、②目的に応じた工夫であるかなど、自分やグループで分析することができるようにするために、視点を明らかにし、言語活動を充実させていく。



カリキュラムの全体を構想する上では、子どもの思いが家庭生活において変わっていくことを想定しながらカリキュラムを組む必要がある。自分の家庭生活において家族の一員として役割を担っていることを実感させることが重要である。

### (1) ストーリー展開の活用

5年生の家庭科学習開始時に、ガイダンス的な内容を設定するとともに、2年間の学習を見通し、2年後の“なりたい自分像”を想定する。その際、知識や技能だけでなく、「自己の成長」及び「家庭生活」について成長に気付くことができるように、重点的に取り上げる。なお、学習指導要領内容A(1)「自己の成長」に関しては、家庭科授業における全領域と関連させて扱う。家庭科学習前には支えてもらっていた自分が、家庭科の学習を通して自分も家族のために役に立っていることを実感し、これまで以上に家庭生活に目を向け、もっと自分の家庭生活をよりよくしたいという思いにつながるようなストーリーを教師側が想定するとともに、子どもたちも“なりたい自分像”に向かってストーリーを展開していけるようにする。

### (2) 「生活を工夫する力」を発揮する場面の明確化

問題の意識化→課題設定→追求活動→課題解決→生活化→家庭生活における実践という一連の過程を繰り返すことを探究とおき、その中に追求活動場面において「生活を工夫する力」を培うように重点化する。

追求していく際に自ら「生活を工夫する力」を使って工夫の仕方を見つけたり、全体の中で互いの工夫を「生活を工夫する力」を使って検討したりする。また、これまでの生活経験や学習において習得した「生活を工夫する力」を、本題材において活用することができる。「追求活動」で培った「生活を工夫する力」は、「生活化」及び「家庭生活における実践」で活用される。特に、「家庭生活における実践」場面では、学校で学んだことを家庭生活でどのように活用するのか、家庭で実践できるようにするために、習得したことを自分の家族や家庭生活に置き換えて実践できようにする。「生活を工夫する力」が、各過程の「活用」場面でどのように発揮されるか、題材構成の段階で明確にする必要がある。

### (3) 根拠に基づいた体験活動の充実

これまでの既習事項をふまえ、実習、製作、実験、観察、実践などの活動を設定する。その際、より実感を伴った学びができるようにするために、条件統制による実験や、結果を比較するための図表・グラフ活用、機器を活用した目に見えないものの数値測定などを取り入れる。例えば、室内の時間的な湿度の変化をグラフで表して分析する活動などが考えられる。

### (4) 言語活動の充実

言語活動の充実を図るために、「より効率的である」「見た目がよい」といった工夫の仕方のよさを追求することに関する視点と、「時間」「場所」といった工夫する場における条件を踏まえて追求することに関する視点などを取り入れていく。

**4 家庭生活において自己の成長を実感する家庭科カリキュラムの具体化**

(1) 題材配列の具体化

学習指導要領改訂や学期制改訂に伴い、カリキュラム創造の視点に基づいて、第5学年の学習は以下のような題材配列が適当であると考えた。

<旧題材配列>

	題材名	時数	
一学期	はじめまして家庭科	1	22
	家族の一人としてⅠ ～家族の役割～	2	
	わたしも調理名人Ⅰ ～なぜ食べるの～ ～ゆでて食べよう～	12	
	気持ちよく生活しようⅠ ～すっきりぴかぴか大作戦～	7	
夏季休業			
二学期	小物作りにチャレンジ	7	24
	わたしも調理名人Ⅱ ～いためて食べよう～	9	
	気持ちよく生活しようⅡ ～寒い時期の快適な住まい方～	8	
冬季休業			
三学期	生活に役立つ物を作ろうⅠ ～ミシンってすごい～ ～古着の大変身～	13	14
	できるようになったこと	1	

<新題材配列>

	題材名	時数	
前期前半	はじめまして家庭科	① 4	22
	小物作りにチャレンジ	6	
	気持ちよく生活しようⅠ ～すっきりぴかぴか大作戦～	6	
	② わたしも調理名人Ⅰ ～なぜ食べるの～ ～ゆでて食べよう～	6	
夏季休業			
前期後半	わたしも調理名人Ⅰ ～ゆでて食べよう～	6	6
秋季休業			
後期前半	わたしも調理名人Ⅱ ～いためて食べよう～ 生活に役立つ物を作ろうⅠ ～ミシンってすごい～	9	16
	③ 気持ちよく生活しようⅡ ～寒い時期の快適な住まい方～	5	
	冬季休業		
後期後半	気持ちよく生活しようⅡ ～寒い時期の快適な住まい方～	2	16
	生活に役立つ物を作ろうⅠ ～古着の大変身～	12	
	④ できるようになったこと	2	

題材「はじめまして家庭科」

【1/4】  
家庭科につながるこれまでの学習や、家庭生活において自分でできることなどについて振り返る。

【2/4】  
家庭科で学習することについて知ったり家庭科室を探検したりする。

【3/4】  
自分の家庭生活を振り返り、問題点やもっと改善したいことについて話し合ったり視点に気付いたりする。

【4/4】  
これから2年間でどのようなことを学習していきたいか、また、どのようなことを目指していきたいか話し合う。

- ① これまで、家庭科学習導入時に当たる5年生の4月に「はじめまして家庭科」の時間を1時間としていたが、家庭生活における自分の役割や4年生までの学習で家庭に生かせることを十分に振り返る活動が必要である。また、卒業までの2年間の学習を通してできるようにになりたいことや、どのようなストーリー展開で学習を進めていきたいかということ等、見通しをもたせる必要がある。そのために、これまでの1時間を4時間に増やしている。
- ② 二学期制の導入に伴い、学期の途中に夏季休業が含まれる。敢えて、題材の途中に夏季休業を位置づけ、家庭において学習中の内容を実践させたり夏季休業後の学習で実感を伴った学びができるようにさせたりする。
- ③ ②と同様である。また、この題材は、子どもの意欲が他領域に比べて高ま



りにくい「住」の領域であり、問題意識を十分にもたせる必要がある。そこで、冬季休業を題材の途中に位置づけることで、学習中の内容について自分の家庭生活ではどのような課題を設定できるのか、意識して振り返らせる機会を与えることができると思う。

- ④ これまで1時間で5年生に学習したことを振り返らせていた。しかし、導入時の「はじめまして家庭科」で設定したストーリーやなりたい自分像、目標などを振り返ったり、「4年生までの自分と比べて家族のためにどのようなことができるようになったか」という自分の成長を実感したりする活動を重視する必要がある。そのために、これまでの1時間を2時間に増やしている。

(2) 家庭生活において自己の成長を実感できるストーリー展開の具体化

2年間の家庭科学習の中で自己の成長を実感できるようにするためには、なりたい自分への意識の高まりをストーリーとして想定し、これまでの自分や今の自分、さらに、これからなりたい自分を明確にできる場を設定する必要がある。その一つとして、評価の工夫が挙げられる。特に自己評価を継続することにより、より自己の成長を実感することができると考えられる。また、そのための働きかけとして、家族や教師など他者からの評価も重要である。

【表3 2年間を通じた子どもの意識の高まり】

主な活動と意識の高まり	想定される子どもの姿例
これまでの自分を振り返る。 ・できていること・手伝い・やってもらっていること・これから学習したいこと など	<ul style="list-style-type: none"> <li>時々お手伝いをすることがあるよ。</li> <li>家のことはお母さんがやってくれているよ。</li> <li>家庭科で料理を作ってみたいなあ。</li> </ul>
家庭科での学習について知る。 ・裁縫・調理・掃除・住居 など	<ul style="list-style-type: none"> <li>料理や裁縫だけでなく、家庭科ではいろいろな学習があるのだなあ。</li> </ul>
家庭でできるようになりたいことを考える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の部屋をきれいにしたいなあ。</li> <li>習い事に行くために使うバッグを自分で作りたいなあ。</li> </ul>
家族のためにできるようになりたいことを考える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>休みの日の朝ご飯を作ってあげたいなあ。</li> <li>リビングで使えるクッションを作ってあげたいなあ。</li> </ul>
家庭での問題点に目を向けられるようになる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>おじいちゃんの部屋は日当たりがいいけど、空気の入換えが難しいなあ。</li> <li>平日はほとんど、家族全員そろってご飯を食べる時間がないなあ。</li> </ul>
家庭に応じた課題を設定することができるようになる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>大きな窓がなくても効率よく換気ができる方法を調べたい。</li> <li>時間をかけずに栄養のある朝ご飯を作る方法を知りたい。</li> </ul>
学校で解決したことを基に、家庭で実践することができるようになる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>わたしの家では向かい合った窓が無いけど、縦長の窓を一つ開ければ、空気の入りと出口になりそうだ。やってみよう。</li> </ul>
家庭で実践することにより、できた喜びを味わう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>学校で学習したことを基にして、自分の家でもできた。</li> </ul>
家族に褒められることにより、認められた喜びを味わう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>お父さんがこんなに喜んでくれるとは思わなかった。嬉しいなあ。</li> </ul>
自分が家族の一員として役割を担っている喜びを味わう。	<ul style="list-style-type: none"> <li>これまでやってもらっていたことだけど、今では自分が家族のためにやっている。わたしが作った朝ご飯を食べて、お兄ちゃんは部活に行くよ。</li> </ul>
さらに家庭生活に生かせる学びへの意欲が高まる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>家族のためにもっとやってあげたい。他にできることはないかな。</li> </ul>
家庭生活の営みへの関心が高まる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>家の中にはいろいろな仕事があるのだなあ。</li> </ul>

繰り返される。

また、これらの意識の高まりが繰り返されながら、自己の成長を実感していくと考えられる。

### Ⅲ 研究の実際

#### 1 実践の立場

衣生活関連学習において、自己の成長を実感することができるために、3つの力が絡まり合って高まる子どもの姿を想定し、学習内容を設定して授業実践を行う。そして、想定や設定の仕方がよかったのかを、以下のような視点や方法、指導計画で子どもの姿から見取り、検証していく。

##### (1) 実践の視点

ア 自己の成長を実感できる子どもの姿の想定

- ・ 目標分析，3つの力が絡まり合って高まる子どもの姿の設定
- ・ ストーリー展開の活用

イ 自己の成長を実感できる学習内容の設定

- ・ 教材分析，これまでの研究や授業からの子どもの見方，考え方の把握
- ・ 「生活を工夫する力」を発揮する場面の明確化，根拠に基づいた体験活動の充実，言語活動の充実

#### 2 自己の成長を実感する家庭科年間指導計画（第5学年・第6学年）

		5年											
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
題材	内容 A(1)「自分の成長と家族」について												
	春季休業	家庭科 はじめまして	小物作り チャレンジ	すっきり びかびか 大作戦	夏季休業	食ゆ べよう	秋季休業	食炒 めよう	す ごい ミ シン って	冬季休業	快適な 住まい の方	古着の 大変身	できるよ うになっ たこと
ストーリー展開の活用	なりたい自分を想定し、自分の目標を立てる。 新たな領域に挑戦する喜び。			当たり前のようにやっていたことの必要性を知る。		新たな領域に挑戦する喜び。 食材や調理法を工夫し調理できる喜び。			工夫次第で速くきれいに縫える喜び。		中間報告。1年間で成長した自分。なりたい自分にどれだけ近づき、何が足りないか自己を見つめる。		
	2年間の学習の見直しをもつ。	身近な布製品に目を向ける。手作りのよさを実感する。		学習したことを基に、家庭に応じた整理整頓及び清掃ができるようにする。		・朝の活動「もりもりタイム」で食べ物の旬について扱い、学習内容と関連付ける。 ・自然教室での自炊活動。			「もりもりタイム」「ハッピーランチタイム」と連携し、食への感謝、作る人の努力や工夫を知る。		家庭との連携（古着にまつわる思い出、1年間で成長した「家庭での我が子の様子」などから、自己を振り返る。）		
生活を工夫する力	問題の意識化→課題設定→追求活動→課題解決→生活化→家庭生活での実践→問題の意識化・・・												
根拠に基づいた体験活動	実習・製作・実験・観察・実践など，通年を通して行う。												
	埃，ダニの視覚化を図り，人体に及ぼす影響を図表・グラフで示す。			長時間ゆでると，野菜にふくまれるビタミンが水に溶け出してしまうということを，ヨウ素液を用いて実験する。				見た目や歯ごたえ，彩りなど自分の好みに応じて炒め方を工夫するために，加熱時間や切り方等を比較する実験をする。					室内の空気の流れを視覚的にとらえられるよう，煙を用いて換気の実験をする。
言語活動	ふり 返し カードへの記入	「見た目よく」「使いやすく」「丈夫に」など視点の明確化		「気持ちがいい」「すっきりする」など，心理的なよさに気付かせる。				「見た目よく」「使いやすく」「丈夫に」など，目的の整理					結果となる視点，その要因となる視点を明確にする。「布端の見た目をきれいにしたい。」→「中表」「縫い糸の色」「縫う部分に応じた縫い方」

(2) 実践の評価

カリキュラム創造の視点	授業における目指す子どもの姿	評価方法
自己の成長を実感できる 子どもの成長の姿の想定	<p>ストーリー展開</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 今まで家族にってもらったことを、自分がしてあげられるようになったという自分の成長に気付く姿 「小さい頃にお母さんがバッグを作ってくれたな。今度はお母さんに作ってあげよう。」</li> <li>○ 家族のために生活に役立つ物を工夫して作ろうとする姿 「お兄ちゃんが着られなくなった服を生かして、お兄ちゃんのためにクッションを作ってあげよう。」</li> <li>○ 古着を再利用することの経済面・環境面におけるよさを考え、実践しようとする姿 「今まではゴミとして捨てていたけれど、工夫すればまた使えるようになるんだな。」</li> </ul>	<p>評価方法</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自分の成長の喜びや家族への思いが表れているか、実践している際に思いや意欲が高まっているか、製作計画やノートによる評価</li> <li>生活の中から課題を見出すことができているか、発言・行動、ノート記述による評価</li> </ul>
自己の成長を実感できる 学習内容の実感設定	<p>言語活動の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ どのようにしたら、自分が作りたい物をイメージ通りに作れるか、知っていることや観察したこと等を関連付けたり、比較したりして製作しようとする姿 「手縫いなら本返し縫いが丈夫だったけれど、ミシンを使えばより丈夫に縫える。」</li> <li>○ 学校で学んだことをもとに家庭でも生活の課題を見つけ解決しようとする姿 「古着を再利用することは経済的だし環境にもいいから、家の古着で再利用できる物がないか見直してみよう。」</li> <li>○ 自分が製作する際や友達の製作の様子から、縫う部分や使う目的に応じて使い分ける根拠を明らかにすることができる姿 「丈夫なバッグにしたいから持ち手は返し縫いをしよう。」</li> <li>○ 製作活動において、「好み」「見た目よさ」「長持ち」といった視点から計画を立て、「安全」「効率的」「無駄がない」といった視点を明らかにして製作することができる姿 「トレーナーのそでの部分は、バッグの持ち手に使うと、無駄なく再利用できるよ。」</li> </ul>	<p>評価方法</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>製作計画や制作中に、自分の知識や技術を生かそうとしているか、発言・行動、ノート記述による評価</li> <li>学んだことを、根拠をもつて製作や生活で実践しているか、ノート記述、また家庭での実践や家族の感想による評価</li> <li>製作の場面における「～のために…する」という発言やノート記述、実践による評価</li> </ul>

二年間を通して自分の成長を実感できるノートの活用

6年												
内容 A(1) 「自分の成長と家族」について												
題材	春季休業 家族の一人として	衣服の手入れ	地域の一人として	夏季休業	地域の一人として	快適生活 プロジェクト	秋季休業 ご飯とみそ汁	家族への おくりもの	冬季休業	家族への おくりもの	家族への おくりもの	春季休業 家族への おくりもの
ストーリー展開の活用	自分の生活を見直す。家族のために役立つことを進んでする。	近隣の人々とのかわりに気付き、自分ができることを考える。	学んだことを生かして家庭で自分の役割を見つけ実践する。	最終報告。2年間で成長した自分。家庭における役割の自覚や家族への感謝。	自分でできるようになったボタン付けや汚れた靴下の洗濯など、家庭生活でも実践する。	地域の行事への参加、近隣の人々との交流を通して、楽しさや助け合う心の温かさを知る。	・修学旅行を通して、家族のありがたさを感じたり、金銭の計画的な使い方や適切な物の購入を実践したりする。 ・朝の活動「もりもりタイム」で食べ物の旬について、栄養面や経済面のよさを知る。	「もりもりタイム」「ハッピーランチタイム委員会」と連携し、食への感謝、作る人の努力や工夫を知る。	家族への感謝を伝える。			
生活を工夫する力	問題の意識化→課題設定→追求活動→課題解決→生活化→家庭生活での実践→問題の意識・・・											
根拠に基づいた体験活動	<p>実習・製作・実験・観察・実践など、通年を通して行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>水温と洗剤の溶け方の関係性を図表・グラフで示す。漂白剤の種類と布地の材質とを対応させて漂白実験をする。</li> <li>日差しを遮ることによる温度の変化をグラフで示す。箱の中に線香の煙を充満させ、通風・換気の実験を行う。</li> <li>だしの有無による風味や栄養の変化を図表で表す。</li> <li>家族の健康を考えた献立を作成できたか五大栄養素を用いて図表で確認する。</li> </ul>											
言語活動	「衛生的」「無駄がない」「効率的」といった科学的根拠に基づいた視点で課題を明らかにさせる。	「楽しい」「気持ちがいい」といった心理面のよさに気付かせる。	心理面（「気持ちいい」「好み」）や見た目（「見た目がいい」）に関する視点、また科学的根拠（「役立つ」「長持ち」「安全」「無駄がない」）を基にした視点で、分かったことを整理する。									

(1) 実践の立場

- ア 衣生活関連学習において、学んだことを具体的に表し、生活を工夫するために活用する力を育てる。
- イ 衣生活の大切さを実感し、日常生活には役立つ布製品があることに気付かせ、「家庭で役立つ物を作ってみよう。」という心情を育てる。
- ウ 衣に関する学習内容についてより深く理解したり、思考力を深めたりすることのできる活動を行う。

(2) 題材「生活に役立つ物を作ろう I ~古着の大変身~」における題材の目標

関心・意欲・態度	生活を工夫する力	知識・理解・技能
日常の衣生活の問題点から、古着を再利用するよさや手縫いやミシン縫いのよさを生かして生活に役立つ物を作ることに関心をもつことができる。	作りたい物に応じて、古着のどこをどのように利用するか、どのような縫い方をすればよいかをこれまでの学習や生活経験をもとに考えたり、製作順序や必要な材料を工夫したりすることができる。	古着がごみとして捨てられる実態に気付き、布端や糸端の始末、ミシンの安全な取り扱い方に配慮して、製作順序や必要な材料を明らかにして製作することができる。

(3) 題材「生活に役立つ物を作ろう I ~古着の大変身~」における授業実践

〈導入〉 カリキュラム創造の視点 手立て 3つの力が高まっている子どもの姿

学習過程	主な活動	具体的な活動と子どもの姿	
みつめる	1 古着や古着のよさについて話す。	家では古いタオルを雑巾にしていたな。	自分の生活をふり返る
つかむ	2 学校生活物について話し合う。	イスに座るとき座布団があると便利だ。古着を使って作れないかな。ミシンもできるようになったから作りたいな。	「できるよ高まる」という思いが高まる
見通す	3 作りたい物グループに分かれ、製作手順などを話し合う。	友達と一緒に作り方を調べよう。〇〇先生に使ってもらえるようにがんばるぞ。	「できるよ高まる」という思いが高まる

〈ストーリー展開の活用〉

- 自分の成長への気付き
- 家族とのかかわり

捨てるのはもったいない。どうにかできないかな。

実際に使っていた古着の活用

そでやすその部分を縫えば綿を詰められるんじゃないかな。

〈「生活を工夫する力」の発揮〉

- 日常生活をふり返り、よりよく生活するために必要な物を考えるための話し合い

〈「生活を工夫する力」の発揮〉

- 小物作りの学習における「使いやすさ」「見た目のよさ」「丈夫さ」といった視点や生活経験による知識をもとにした調べ活動

クッションを作る手順が載っているよ。これを生かせないかな。

〈展開〉

学習過程	主な活動	具体的な活動と子どもの姿	
追求する	4 製作をする。	ミシンを上手に使えるようになったから、きれいに縫えるね。	「よりよくなりたい」という思いが高まる
追求する	5 観察したり使った点課題を見ける。	まっすぐは縫えたけど布はしの見た目が悪いね。もっと見た目をよくなりたいな。	「よりよくなりたい」という思いが高まる

〈体験活動〉

- ミシンを使った製作活動


同じ物を作る子どもでのグループ編成による教え合いの場の設定

〈「生活を工夫する力」の発揮〉



- 使いやすさ・見た目のよさ・丈夫さの追求
- これまでの学習を生かした製作
- 手順や縫い方の根拠の明確化

何冊本を入れられるか試してみよう。

設定したテーマをふりかえり、追求の視点を確認させる。

追求する	6 課題を追求する。	縫ってからひっくり返すと縫い目がきれいになっているね。本で調べたら、こういう縫い方は「中表」っていうらしいよ。	よりよくするための方法の明らかにできたことによる製作意欲の高まり	実際に使用して感想を出し合わせる。	〈体験活動〉 ○ 試し作りの作品の目的に応じた使用についての確認
	7 分かったことをまとめ、情報交換をし合う。	丈夫にするためには返し縫いをしたらいいんだね。使いやすい大きさも大切だ。		 <p>使いやすい腕カバーにするには、どうしたらいいかな。</p> <p>巾着袋は、丈夫にするために、ひもを通す部分を返し縫いすると、ほどけないね。</p> <p>〈「生活を工夫する力」の発揮〉 ○ 課題追求による根拠が明らかになった解決策</p> <p>〈言語活動〉 ○ 根拠に基づいた分かりやすい発表 ○ 自分の製作に生かすための情報の収集</p>	

〈終末〉

学習過程	主な活動	具体的な活動と子どもの姿			
追求する	8 家庭生活物考についてアイディアをする。	試し作りの結果を生かして、もっと上手に作りたいな。今度はおばあちゃんのために座布団を作ってあげよう。	自分の目的に合った物を作ってきたという自信や達成感	〈ストーリー展開の活用〉 ○ 家庭生活上で役立つ物を作ろうという意欲 ○ 使う人のことを考えたアイディアスケッチ	「○○のために、…という工夫をする」という根拠を明らかにするための視点を確認する。
	10 製作をする。	試し作りではうまくいかなかった中表がしっかりできたぞ。		〈体験活動〉 ○ 計画に沿った製作活動	 <p>バッグの持ち手に平テープを使うと持ちやすいし、丈夫になるぞ。</p>
まとめる	11 家庭でも使った感想を出し合い、今後の生活に生かしていくか話し合う。	喜んでもらえてよかった。次はお父さんにも作ってあげよう。	家族のために自分がやってあげたいという思いの芽生え	<p>家族の役に立つってうれしいな。他にも何かできることはないかな。</p> <p>〈ストーリー展開の活用〉 ○ 家族の役に立ったという満足感・達成感 ○ できるようになった自分への気付き</p>	 <p>できるようになった自分、家族の一員として役立った自分に気付き、自信をもつことができるように、家族からの感想を紹介する。</p>
生活化への意欲付け					

(4) 実践の考察

試し作りの結果を「表から縫うと、縫い目が見えて見た目が悪いから……。」  
「縫い始めがほどけてきた。手縫いなら玉止めをするけど……。」など、体験したことを具体的な言語で説明させることで、課題がより明確になり、「使いやすい」「丈夫に」「見た目よく」するために何を解決すればよいかという見通しをもつことができていた。また、追求した結果を図示させたり、実物を見せたりさせると、「こうすれば丈夫にもなるし、見た目もよくなるから、ぼくは……。」など、結果を関連付けて製作に生かす姿が見られた。終末段階では「○○に誕生日プレゼントを作りたい」など、家族を意識した家庭での実践意欲も見られた。これらのことから、家庭科における言語活動や根拠に基づいた体験活動を充実させることによって、自分の作品がよりよくなったり、相手に喜ばれたりしたことが自己の成長への気付きにつながり、今後の家庭生活においても経験や知識を生かして生活をよりよくする工夫ができることを実感させることができるということがわかった。

## IV 研究の成果と課題

### 1 研究の成果

- 家庭科における目指す子ども像に向かうカリキュラム創造の視点を明らかにすることができた。
- 自己の成長を実感できるようにするための視点に基づいた活動を設定することで、これまでの自分と比較して家庭生活における自分の役割を意識する姿が見られるようになった。
- 生活を工夫する力だけでなく、家庭科における「関心・意欲」と「知識・理解・技能」について具体的な目指す姿をカリキュラム上に想定することができた。
- 実際の生活場面で作品を使用し課題を設定させることで、目的意識をもって次の活動に取り組む姿が見られた。このことなどから、体験活動が問題意識を高める要因となることが分かった。
- 教科だけでなく、他教科との関連や他の教育活動などを含むカリキュラムとといった広い視野で子どもたちの自己の成長について捉えることにより、教科としての位置づけがより明確になった。

### 2 研究の課題

- 家庭生活において自己の成長を実感するカリキュラム創造の視点は明らかになったが、子どもたちがどの程度実感しているかという評価の方法や2年間の学習記録の方法について検討する必要がある。
- 根拠に基づいた体験活動をより充実させるために、題材に応じた体験活動の具体化と、体験活動場面での子どもの思考の明確化を一層図る必要がある。

#### 【主な参考文献】

- 桜井茂男「学習意欲の心理学」 (誠信書房 平成 17 年)
- 田部井恵美子・池崎喜美恵・内野紀子・青木幸子「家庭科教育」 (学文社 2002 年)
- 長澤由喜子・鈴木明子編集「平成 20 年改訂 小学校教育課程講座 家庭」 (ぎょうせい 2008 年)
- 文部科学省「小学校学習指導要領」 (平成 20 年)
- 文部科学省「小学校学習指導要領解説 家庭編」 (東洋館出版社 平成 20 年)
- 文部科学省教育課程科、幼児教育課編集「初等教育資料 (各月号)」 (東洋館出版社 2009 年)